
クォーター

葵 凜香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クォーター

【Nコード】

N9570A

【作者名】

葵 凜香

【あらすじ】

朱莉、塔子、智樹、雅弘。幼なじみの4人は『塔子が18歳になったら……』という約束をする。いろんな事があるながらも、約束の時を目前に迫っていた。しかし、1つの事件を境に少しずつバランスを崩していく…。

プロローグ（前書き）

この物語を作品中の智樹に捧げます。

携帯でも読みやすいように本来あるべきでない改行、空行を入れています。

PCユーザーの方は読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

また、各章ごとで一人称・ストーリー進行目線が変わります。混乱を招くかも知れませんが、ご了承ください。

この章は 朱莉 目線です。

プロローグ

小学5年生のある日、私たちは公園に向かって走っていた。放課後いつもの集合場所で待っていても塔子が来ない。掃除時間にクラス男子から何か言われてるのを智樹が見かけたらしい。きっとそれが原因に違いない。私たちは急いで学校を後にした。

智樹と智樹のお兄ちゃんの雅弘、そして塔子と私。幼なじみの私たちはいつでも一緒にいた。昔から塔子は嫌なことがあると、公園で泣いていた。

「塔子！」

公園のベンチで塔子を見つけて3人共息を切らせて近づくと、塔子は顔を上げた。

「あかり朱莉……」

塔子の瞳からは大粒の涙が溢れていた。

「塔子どうしたの?!」

塔子は私の腕にしがみついて、何も話そうとしない。

「クラスの奴に何か言われたのか？」

雅弘も塔子の隣に座り、頭を撫でながら慰めた。

「うるさい奴は殴り飛ばせばいいだよ！正拳突きでバシッと」

智樹は得意の空手の型を見せながら元気つけた。

「塔子にそんなこと出来る訳ないでしょ?! 代わりに私が倒すから! ね、もう泣かないで」

空手バカの智樹に軽くダメ出しをしながら私は塔子の手を握った。それでも塔子は泣き止まなかった。

「……ねえ塔子、アイツらに何て言われたの?」

私の塔子の顔を覗き込見ながら尋ねた。塔子は引きつけを抑えながら一生懸命話し始めた。

「……パパとママがいないからっ……バカにされたのっ……。これから大きくなってもっ……お前はずっと……ずっと1人ぼっちなんだって……」

幼いながらに胸がズキンと痛んだ。

塔子は物心ついた時から施設で育った。両親は生きているのかさえわからない。普段は決して口にしないが、寂しい気持ちはきつと積もり積もっているはずだ。私は何も言えなくて、塔子の手を更に強く握り締めた。

「なーんだそんな事か」

智樹はあっけらかんとそう言って塔子の前にしゃがみ込んだ。

「じゃあ4人でずーっと一緒にいればいいだけじゃん!」

笑顔の智樹はそう続けた。

「……そんなの無理だよ。私は施設だし、大人になったらきつとバラバラになるもん……」

いじける塔子を見かねて、私は勢いよく立ち上がった。

「それじゃあさ、塔子が18歳になったら4人で一緒に住もうよ」

「えっ?!」

びっくりしている塔子を余所に、智樹も雅弘もこの提案に賛成した。

「じゃあ、兄ちゃんは頭がいいから会社でも作って生活費を稼いでよ」

「ちょっと待てよ! 塔子が18歳なら俺まだ19歳だろ?! 大学生じゃん!……まあいいか、どうにかするよ」

いきなり一家の財政を任された雅弘は、困惑しながらもその役割を引き受けた。

「塔子は料理作ってね。私、塔子を作るシチュー大好き!」

私がそう言うと、まだ半泣きの塔子は首を大きく縦に振った。

「うん、料理なら出来る! みんな一緒なら毎日がんばる」

「俺はもっと強くならなきゃな! 塔子も朱莉も兄ちゃんもみんな守

ってやれるくらいに」

智樹はニカツと笑い、また突きのマネをする。

「朱莉、お前はどつする？」

「うゝん……」

雅弘の質問に私は少し考えた。

お金はあるし、家事もやってもらえるし、頼りないけど守ってくれる人もいる。私にやれる事って……なんだろう。

そうだ！

「私はみんなの仕事を手伝う！」

私は自信満々に答えた。

「塔子の料理を手伝って、雅弘の仕事も一緒にやる！智樹は頼りないからあたしがみんなを守ったげる！」

私の答えが予想外だったらしく、3人は同時に吹き出して笑った。

「朱莉、手伝ってなんだよ！それに俺がお前に守られるとかありえないし！」

「なによ？私は真面目に言ってるのに！もう、塔子まで笑わないでよ」

口ではそう言ったけど、塔子が笑ってくれて嬉しかった。

私は早く18歳になりたいと思うようになった。

3年後―

智樹は塔子に告白をした。塔子も昔から智樹の事が好きだった。でも、塔子は付き合う事を躊躇した。4人のバランスが崩れてしまふの恐れていた。

翌日、塔子は私ににこのことを相談しに来た。私は話を全部聞き終えてから口を開いた。

「塔子は智樹の事が好きなんですよ？」

「うん……好き」

「じゃあ悩むことなんてないじゃない。アイツほど塔子を想ってる男はきつといないよ？」

「…うん」

塔子もその事は十分に感じていた。

「塔子、実はね……私と雅弘も付き合ってるんだ。」

「うそっ?!いつから?!」

私のカミングアウトに塔子は大きな瞳を更に大きく見開いた。

「1カ月くらい前からかな。黙っててごめん!」

私は顔の前で手を合わせた。

「だからって訳じゃないけど、塔子が智樹を好きなら遠慮なんかしないで付き合ってよ。塔子には幸せになって欲しい」

私は塔子に微笑んだ。

「智樹のトコに行って来るね!」

塔子はバッグを持って智樹の元に走って行った。私はそんな塔子の背中を満面の笑みで見送った。

この先、何があってもずっと4人でいらるって思ってた。未来はもっと幸せだって。私も他の3人もきつと、疑う事を知らなかったんだね。

未来のために（前書き）

この章は 雅弘 目線です。

未来のために

俺にとって朱莉が特別な存在になったのはいつからだろう。もちろん塔子もかわいしいし、智樹だって手はかかるがかわいい弟だ。

でも朱莉に対しては特別な感情があった。きっと初めから、家の庭で智樹と塔子の4人ではしゃいでいた頃からずっと朱莉を好きだった。年月を重ねる毎に俺の朱莉への気持ちも折り重なる。

ツヤのある漆黒の長い髪。

細い身体から伸びた長い手足。

勝ち気な性格をよく表した強い目。

。 一見クールだが、常に周りを気にかける優しさ。

俺は朱莉をつくるすべての要素を心から愛していた。

3人より1年早く高校を卒業した俺は、大学の入学準備を進めていた。日頃から勉強好きだったから特に受験勉強には力を入れなかった。遠くの大学に行く気は無いし、そんな時間があるなら4人で暮らすための資金を稼いだり、朱莉と一緒にいたかった。

誰かが階段駆け上がってくる音が聞こえて、部屋の扉がノック無しに開かれた。

「兄貴、朱莉が来てるぜ」

智樹だった。

「朱莉？じゃあ部屋に呼んで」

俺は椅子に座ったまま首だけ振り返った。

「俺もそう言ったけど、外で話したいらしいよ」

俺はテキストを閉じて立ち上がり、近くにあったシャツを1枚はおった。

「兄貴」

「なんだよ？」

智樹はわざわざ横まで寄って来て、ニヤニヤしながら肩を組み小声で呟いた。

「避妊には気をつけろよ！」

「……………アホ」

智樹の手をため息混じりに払い除け、階段を駆け降り玄関に向かった。

「いきなりごめんね！時間大丈夫だった？」

俺が笑顔で大丈夫と答えると、朱莉も笑顔を返した。課題はまた後でやるっ、そう思いながら家を出た。

並んで歩くと朱莉はすぐに手をつなぐ。朱莉の手はいつも俺より冷たい。

「どこ行く？」

しばらく世間話をした後そう聞いた。

「雅弘、海……海に行きたいな」

「海……朱莉何かあったのか？」

朱莉が俺を海に誘う時は大切な話がある時だ。朱莉は着いたら話すね、と言って話題を世間話に戻した。

10分程歩くと広い海が見えてくる。空は水色からオレンジに染まり始めていた。

「寒くない？」

「このくらいなら平気。」

俺達は手をつないだまま砂浜のコンクリートに座った。

「……で、どうした？」

体操座りの朱莉は一つ息をついた。

「私ね、少しココを離れようと思ってるの」

朱莉の手を握る力が少し強くなった。

朱莉が最近悩んでいるのに気付いていた。朱莉は意思が強い。だから相談なり報告なりされるまで俺は敢えて何も聞かなかった。

朱莉の父親は世界の民族研究をしていて、朱莉と母親を残してよく単身で世界を飛び回っていた。朱莉も中学の頃から研究に興味を持ち始め、その方面に進もうと考えていた。

そんな時に父親が来週からまた他国に行く事が決まり、今回は朱莉と母親も付いていくことにしたのだ。

「高校はどうするの？」

「辞める。帰って来たらお父さんの研究室に入れてもらって研究を続けようと思ってる」

まだ冷たい春の潮風が朱莉の髪をなびかせていた。

「朱莉が自分で決めたんだろ？」

「うん」

「じゃあ精一杯がんばれ。じゃなきゃ後悔するだろ」

「うん」

俺は1年間朱莉と離れる覚悟をした。きっと1年なんてきつとあつという間だ、自分に言い聞かせた。

「それでね……塔子になんて言ったらいいかな…？」

しばらく続いた沈黙を朱莉が破った。

「4人でずっと一緒にいるって言ったのに……。離れること怒ったりしないかな？」

多分、朱莉の心配は最初から俺じゃなくて塔子だったんだろう。さっきまでいつもの強い目だったのに、塔子の話になるとすぐ目を赤くなった。

「思ってることをありのままに話せ。お前が泣いたら塔子も泣くぞ」

俺は朱莉に優しく笑いかけた。

「塔子…智樹がいるから私がいなくても大丈夫かな。もう私のこと必要だと思ってくれてないよね……」

小さく震える朱莉の手に雅弘は力を加えた。

「朱莉は俺さえいれば塔子も智樹も要らない？」

朱莉は首を横に振った。

「じゃあ塔子も同じだよ。俺も智樹も同じだ。朱莉は朱莉の為に勉強しに行くんだから少し離れる事を塔子が怒る訳ない。みんなお前を応援するよ」

朱莉は小さく頷いた。

「これから2人に話に行く。…雅弘も来てくれる？」

「当たり前だろ。お前が泣いたら話出来るヤツがいなくなるからな」

「泣かないよ！」

朱莉は口を尖らせていつもの口調に戻った。

俺は朱莉にキスをした。自分に頼ってくれたのが嬉しかったし、いつもはカッコイイ朱莉が今日はとてもかわいく感じられた。唇を離し笑うと、朱莉は照れ隠しをしながら立ち上がった。

「雅弘ありがと。今ので勇気もらった！」

すっかり暗くなった浜辺でサーチライトは、いつも通りキレイでカッコイイ朱莉を照らしていた。

その夜、施設をこっそり抜け出した塔子と空手の帰りの智樹を呼び出した。

「……そついう事で私、来週から1年間行ってこようと思ってるの」

「来週って、そんな急に……」

「ごめんね塔子。いきなり決まったから」

朱莉も塔子も目に涙が溜まり始めていた。

「あっちにずっと住んだりしないよね？」

「それは無い。絶対戻ってくるから」

塔子は何度も何度も帰って来ることを確認した。朱莉と離れるのがどれだけ嫌なのかが伝わった。

しばらくして黙って話を聞いていた智樹が口を開いた。

「朱莉、塔子のことは俺と兄貴にまかせて、お前はちゃんと勉強しに行つてこい」

「智樹……」

「そのかわり絶対1年で戻れよ！お前が帰って来る頃には塔子が18歳になつて4人で一緒に住めるようになるんだ。約束は守もれよ！」

朱莉は穏やかに笑つて頷いた。

「それは絶対守る。1年間がんばつて、来年の今頃には私が塔子を迎えに行くよ」

「朱莉」

塔子は朱莉に抱きついて泣いてしまった。

「塔子、抱きつくなら俺にしろよ！」

手を広げて本気で情けない声を出す智樹を俺と朱莉は笑った。

満月（前書き）

この章は 塔子 目線です。

満月

出発する前日、朱莉の両親は実家に泊まりに行っていたので私たちは朱莉の家に集まった。外泊許可を取った私は朱莉の好きな料理をたくさん作った。朱莉を明るく送り出すために私たちはとにかく騒いだ。

「あゝお腹いっぱい！塔子の料理はマジ最高！塔子、結婚しよう！絶対幸せにするから！！」

「智樹なに言ってるの？！塔子は私の嫁よ！ねっ塔子」

ビール2杯で酔っ払った智樹とハイペースでお酒を飲んでテンションが上がった朱莉は終始つまらない言い合いをしている。

「バカな争いはやめろっ！……だからお前らに酒飲ませるのイヤなんだよ」

ため息混じりになだめる雅弘に朱莉と智樹は揃って、イーッと歯を見せる。2人に両手を引っ張られて少し痛いけど、私は楽しくて笑っていた。この瞬間がたまらなく愛しい。

「3人とも手出して」

雅弘がバカ騒ぎを止めて3人を呼んだ。

「なに？」

「いいから」

3人とも素直に手を出した。雅弘は手の平に1コずつ箱を渡した。

「……なに？」

「開けてみ」

一番に朱莉が箱を開くと中にはメタリックの赤いボールペンが入っていた。

「きれー」

私にはピンク、智樹には水色、そして雅弘の手には黒の同じメタリックカラーのボールペンがあった。ペンには『QUARTER』という刻印がしてあった。

「兄貴、これ何て読むの？」

「クォーターだね？雅弘、何でクォーターなの？」

雅弘は微笑んで答えた。

「クォーター、意味はわかるだろ？4分の1だ。俺たちは4人で1つ。だから『QUARTER』って彫ったんだ。」

「4人で1つか。私、ちゃんと戻って来ないとね」

朱莉は空から4人を照らす満月を見つめそう誓った。

あとかたづけが終わって、私はフラフラと立ち上がる智樹を朱莉の部屋に寝かせに行った。少し2人きりにさせてあげようと思った。

朱莉と雅弘は並んでソファに座った。

「雅弘、ペンありがと。これがあれば淋しくないよ」

朱莉は微笑みながら『QUARTER』の刻印を指でなぞった。

「朱莉、こっち向いて」

朱莉は体ごと雅弘の方を向いて見つめ合つと、どちらからでもなく唇を重ねた。朱莉が雅弘の首に腕を回すとキスはだんだん深くなり、朱莉はゆっくりソファに寝かされた。

「ちよっ雅弘、ここはヤバいって！塔子と智樹が……」

「大丈夫だろ、アイツら多分戻って来ないから……俺と2人の時は俺だけ見ろよ」

雅弘の目が少し淋しそうに見えた。

「……1年間浮気しない？」

「……は？」

朱莉からの脈絡のない質問に雅弘の動きが止まった。

「大学でかわいい子に言い寄られてフラツと行ったりしないですよ？」

雅弘は嬉しそうに笑った。

「信用しろ。俺は朱莉しか見えないし、朱莉よりかわいい女なんてこの世にはいないからな」

朱莉が照れながらバカ、と言うと、雅弘は軽いキスをしてその唇を首筋へと這わせて行った。朱莉は雅弘に身を任せた。

朱莉の部屋で酔い潰れて眠る智樹の隣で、私は『QUARTER』のペンを見つめていた。

「朱莉、明日からいなくなっちゃうんだよね……」

みんなを困らせないようにと平静を装っていたけど、1人で考えて込むと淋しさが押し寄せた。

「塔子……泣いてんの？」

智樹が目を覚まし私を見ていた。

「起こしてごめん……私、戻るから智樹は寝てて」

立ち上がろうとしたら手を掴まれベットに引き戻されて、智樹に強く強く抱きしめられた。

「俺、朱莉の分も塔子のこと守るから。だからさっきの話、本気で考えてみてくれない？」

「さっきの話って……？」

「結婚しようって話」

あの言葉、酔った勢いだと思ってた。

「今すぐは無理だけど、高校卒業して大学卒業して、それから結婚したいんだ、塔子と」

私は智樹の胸から顔を離し、何も言わないで頷いた。智樹は子供みたいに笑ってキスをした。唇が離れ目が合う。

「智樹、もっと……して」

言った後、自分の顔がどんどん熱くなるのがわかった。

「塔子愛してる」

智樹は笑いかけて何度も何度もキスをして、そのまま愛おしそうに私を抱いた。

翌朝、目を覚ました私は見える風景が施設じゃないことに気付くまで少し時間がかかった。

「おはよう」

「……おはよ……」

隣には智樹がいる、……裸で。……ん？って私も服着てない！

「きゃー……」

驚いて思わず叫びそうになった私の口を智樹が慌てて押さえた。

「塔子っ！今叫んだらどうなるかちよつと考えろ！」

……今叫んだら？

ここは朱莉の家。居間にいる朱莉と雅弘に聞こえて2人が飛んできく。そしたら智樹と裸でいるのを見られて……

「……最悪の事態」

「正解」

ため息を吐く智樹を見ながら私はあることに気付いて智樹に背を向けた。

昨夜リビングに戻らずに朱莉の部屋で何をしてたかなんて言えないし。

私は朱莉への言い訳を考えていた。

「……塔子、別に朱莉に言わなくていいからな」

「えっ？何で考えてる事がわかるの?!」

驚いて振り返った私に智樹はやっぱりな……と呆れ顔。

「塔子の思考は単純だからな」

私より絶対に智樹の方が単純なのに図星だから言い返せない。膨れると智樹は笑いながらベットを下りた。

「体、キツくない?」

「うん、平気」

「じゃありビングに戻るか」

私たちは服を着て朱莉の部屋を出た。

「ずっと部屋でいたこと怪しまれないかな?」

「大丈夫じゃない?俺たちはあの2人のために席を外してやったの」

智樹は、俺っていい弟だねえと付け加えながら笑顔で私の手を引いた。

「おはよう」

居間に入ると朱莉と雅弘はテレビを観ていた。朱莉の隣には最小

限の荷物がまとめられていた。

「2人も来たことだしそろそろ行こうかな」

朱莉は長く時間を取らずに家を出ることにした。

この町は空港まで電車で1時間半。朱莉が空港までの見送りを拒んだので、私たちは歩いて5分の駅で別れる事にした。駅には他に誰もいなかった。

「あと5分か。朱莉、海外だからってハメを外すなよ？」

「智樹じゃないんだからそんなことしないわよ。塔子のこと泣かしたらただじゃおかないからね」

「任せとけて！」

智樹と朱莉は軽くお互い突き合いながら約束を交わした。

「塔子、智樹に泣かされたらすぐに手紙送るのよ？すぐに飛んで帰ってくるから」

「うん。朱莉も気をつけてよ？帰ってきたら朱莉の好きなものいっっぱい作ってあげるから」

「楽しみにしてる。塔子愛してる〜！」

「私も〜!!」

朱莉と抱き合って約束をした。

抱擁を終えると朱莉はゆっくり雅弘の方を向いた。

「雅弘、昨日の約束ちゃんと守ってね？」

「破れって言われる方が難しいって。安心しろ」

2人は昨日いろいろ話したんだろうな。交わした言葉は少なかった。

「お願い、勇気ちょうだい」

そう言うと、雅弘は朱莉にキスをした。私と智樹はお互いつないで手に力を込めて2人を見守った。

朱莉は電車に乗って異国へ旅立った。窓越しに見た朱莉は、泣きながら笑顔を見せた。私も涙を拭いながら手を振った。

私が朱莉の涙を見たのは、この時が最後だった。

手紙（前書き）

この章は 智樹 目線です。

手紙

* * * * *

メリークリスマス！

塔子、雅弘、智樹！3人とも元気？

私はもちろん元気だよ。

こっちでの生活もすっかり慣れて、現地の人達とも仲良くなりました！

あと3カ月したら帰るからね。

延長とかしないから安心して。

ちようどパスポートの期限も切れちゃうから急いで戻るよ。

それじゃあ塔子と智樹は受験勉強がんばれ！

雅弘もバカ智樹に勉強教えるのがんばってね。

私もがんばるから！

12・24 朱莉より

* * * * *

送られたクリスマスカードには、長い髪をまとめた朱莉が変わった形の建物の前で写った写真が同封されていた。この手紙が届いたのは、年が明けて約一週間経った頃だった。

「メリークリスマスって……ケンカ売ってんのか？ こっちは勉強でクリスマスも正月もねえのに！」

俺はギリギリになって本気で勉強を始めてたからかなり焦り出していた。

「智樹く私、彼氏が浪人生なんて嫌だなあ」

「じゃあ塔子、智樹が大学落ちたら別れちゃえ」

「なっ……！」

塔子は兄貴と笑いながら俺をあおった。

朱莉がいなくなってから、塔子は少したくましくなった。塔子には1年間の『朱莉離れ』がいい事だったみたいだ。

「お昼ご飯出来たよ。今日は塔子特製チャーハンです！」

「よしっ！休憩休憩」

「お前メシの時だけ反応早いよな……」

「まあいいじゃん！腹が減っては戦は出来ぬってね。兄貴テレビつけて！」

「はいはい……」

冬休み中はいつもこんな感じだった。共働きのうちの両親の代わりに塔子が昼メシを作ってくれる。3人でテレビ観ながら騒いで、昼からまた勉強。受験の追い込み時期だから当然といえば当然だ。

勉強ばかりの毎日でも俺は結構楽しんでた。

「そうそう兄貴、この問題ってこの公式でいいの？」

「お前どうしたの？メシの時間なのに」

「あゝ、なんか今のうちに聞かないと忘れそうだから」

「どれ？」

俺が口をモゴモゴさせながら話していたから、塔子は台所にお茶を入れに行った。

「智樹、テレビ消すぞ？」

「待つて、塔子がニュースの後の占い好きだからつけとこ。兄貴はこの問題に集中集中！」

兄貴はニヤリと笑いながら問題を解説し始めた。

ガシャン！！

勉強に集中していた俺は音に驚き顔を上げた。部屋の入口には湯飲みを床に落とし、呆然と立ち尽くす塔子がいた。

「塔子……？」

俺が近寄ろうとすると塔子は一言呟いた。

「あ……かり……」

俺は力無く倒れ込む塔子を支えた。

「塔子?! 塔子!」

塔子はグッタリとして意識を戻さない。慌てて兄貴を見ると、さつき塔子が見ていた方向と同じ方向を見ていた。

視線の先には……テレビ。

俺も急いでテレビに目を向けると一瞬で画像が切り替わった。

『……次のニュースです。先日横領罪で逮捕、起訴された……』

「智樹、塔子を頼む」

「ちよっ……兄貴?!」

兄貴はそれ以上何も言わず、自分の部屋に走って行った。状況が掴めず焦る俺は、目を閉じてテレビで見た一瞬の映像を思い出す。建物が見えた。あちこちで煙が見えて、その中に攻撃を受けて破損した建物。……あの建物、見たことがある。参考書? 問題集?

「……くそっ!」

俺は頭を掻きながら必死に記憶を辿る。

『あかり』

塔子の言葉を思い出し、俺は息を飲んだ。抱き抱えていた塔子を

ソファーに寝かせて、さっき見たクリスマスカードの写真を取り出す。

間違いない。朱莉の後ろには……爆破される前の奇形な建物。俺は兄貴の部屋に走った。

「……はい……はい、間違いありません。……よろしく願います。……はい」

扉が開けっ放しの部屋に入ると、兄貴はインターネットを開いた状態で誰かと電話していた。ディスプレイにはあの建物が映っていた。

”現地時間の昨日、反乱軍による内戦再開。中立民族を攻撃し死者が多数出ている。現在確認されている邦人死亡者は2名。

○○大学教授 民族研究学者

高倉 俊介さん

妻 真奈美さん ”

それは朱莉の両親だった。頭が痛くて吐きそうになる。

「連絡待ってます。よろしく願います」

しばらくして兄貴は携帯を切った。

「兄貴……朱莉は？」

「……わからない」

兄貴は両手で頭を抱えた。

「朱莉、死んだりしてねえよな？」

「今、外務省の人に確認を取ってもらってる。朱莉、行方不明らしい。」

「……んでだよ」

俺はその場にしゃがみ込み頭を抱えた。

「お前らが不安になると思ったから言っただけ、朱莉の行った国は前から政府と反乱軍が対立して内戦が起っていたんだ」

「内戦って…戦争だよな？兄貴はわかってて行かせたのかよ?!」

俺の怒りの矛先は兄貴に向いていた。兄貴を責めるのは間違っているってわかっていても、俺は怒りを抑えることが出来なかった。

「ここ2年くらい争いはおさまっていた。朱莉のおじさんは内戦に中立な立場の民族を選んで万が一の場合に備えていたんだ。中立民族は侵略された場合、逆らわないで従うんだ。だから危害を加えられる心配がないはずだったのに……」

兄貴は俺に背を向けたまま話を続けた。

「両親の遺体があるのに朱莉と一緒に確認出来ないってことは逃げたか、たまたま別の場所にいたか、連れていかれたかだと思う」

俺は震える体を起こし、兄貴に背を向けた。

「俺……塔子についてるから」

俺はゆっくりと階段を降りた。

ため息をつきながら居間の扉が開けた瞬間、俺は啞然とした。塔子がテーブルの前に座り何か書いていた。

「塔子なにしてる……？」

机の上のノートや参考書をは乱暴に散らかされ、塔子はただ黙々と何かを書いていた。

「塔子？」

「邪魔しないで」

肩に手をかけると、思いきり跳ね退けられた。あまりに強い塔子の力に驚きながら、俺は塔子を書く紙を横から覗いた。

『朱莉、もう年が明けたね。私も智樹も受験前でがんばってるよ。』

ねえ朱莉、少し早めだけど帰って来て。朱莉がいないと寂しいんだよ？朱莉早く帰って来て
寂しい寂しい寂しいさみしいさみしいさみしい』

「塔子…」

俺は愕然としながら塔子からペンを奪おうと右手を掴んだ。

「智樹離して！」

塔子はペンを放さず、奪い合いで参考書がバサバサ落ちていく。

「塔子！！！」

俺はペンを取り上げ、塔子の両肩を抑えた。

「なんで…？なんで邪魔するのよ……」

塔子は視線が定まらないままポツリと呟いた。

「朱莉言ったじゃない…『手紙書けばいつでも戻って来る』って」

塔子の目からひとすじ涙が流れた。

「塔子、よく聞け。朱莉は今、どこにいるか分からない……。でも朱莉は帰って来るから。絶対帰って来るから……」

「……朱莉っ」

泣き出す塔子を抱きしめることしか出来なかった。本当は俺だつて不安でたまらない。

数日待つても外務省からたいした連絡もなかった。

俺たちの心に暗い影を落としたまま、高校は新学期を迎えた。

「なあ、テレビに出てる行方不明の高倉朱莉って去年までウチにいたあの高倉だろ?！」

「俺も見た!まさかとは思ってたけどさ」

登校すると学校は朱莉の話で持ち切りだった。人がしゃべる朱莉の話は、『身近に起きた大事件』を面白がってる様にも聞こえた。教室に着いて席に座ると塔子は俯き目を閉じていた。俺は塔子を学校に連れてきたくなかった。でも施設だからそうはいかなかった。

「塔子ちゃんおはよう」

塔子の前には沙希と夏子が立っていた。この2人は朱莉が学校を辞めてから塔子とよく一緒に行動をしている。

「おはよう」

心配をかけないようにと塔子は笑顔を見せたが、力の無い痛々しい笑顔だった。

「塔子、元気だして。って言ってもムリかもしれないけど」

「朱莉ちゃんならきつと大丈夫だよ！」

2人が励ます言葉に塔子は何も言わないでさっきと同じ笑顔をした。

教室の扉が勢いよく開き、騒ぎながら男子が入ってきた。田中たちだ。

「内戦に巻き込まれて親が死んで行方不明ってドラマかよ?! ってな！」

「俺んちテレビ局の取材とか来たぜ?」高倉さんはどんな一家でしたか?』って。」

1人が記者の真似をすると、それを見てグループ全員が笑った。

コイツら最低だな。

俺はそう思いながら塔子を連れて教室を出ようとした。でも田中たちの会話が聞こえてくる。

「高倉って田中のこと振ったから罰が下ったんじゃない?」

田中が朱莉を口説きまくっていたのは学年でも有名な話だった。

兄貴と付き合っていた朱莉はしつこく言い寄ってくる田中の事を嫌い、ヒドイ振り方をした。

「うつせーよ!別に好きだった訳じゃねえし」

「じゃあなんであんなにコクったんだよ?」

「アイツ美人じゃん？連れて歩くには最高と思ってな」

「確かに！顔とスタイルは抜群だったよね！」

「ああ、だから死んだんだよ。『美人薄命』ってな！」

神経を疑うような会話に耐え切れなくなって俺は田中につかみ掛かった。

「なんだよ智樹、離せよ。俺は高倉を褒めてやってんだぜ？そんなに熱くなんなつて！」

「朱莉は死んでねえんだよ！」

言い終わらないうちに俺は拳を振り上げていた。

「智樹やめてっ！」

隣にいた塔子がとつさに俺の右腕を抑えた。

「俺、女に守られちゃった！塔子ちゃんサンキュー！あははは！」

田中たちの大笑いが響き渡る中、俺は塔子と教室を出た。

「今日は帰ろうか」

俺はどうしても塔子を教室に戻したくなかった。塔子は黙って頷いた。

「ただいま」

俺たちが疲れて家に帰ると、兄貴の声が聞こえた。

「智樹！塔子！朱莉から手紙が来てる！」

俺たちは自分の耳を疑った。2人で顔を合わせて走って兄貴の部屋に向かった。

* * * * *

塔子、雅弘、智樹、心配かけてるかな？

報道とかあつてるか分からないけど、内戦が始まりました。

パパとママは巻き込まれて亡くなっています。

私はどうにか戦火から逃げ切れました。

大使館に行けばすぐに日本に帰れるんだけど、どうしてもやらなくちゃいけない事がある。

塔子が18歳になったら一緒に住むって約束、まだ守れそうにないの。

ごめんね。

でも必ず帰って来るから、それまで心配しないで待って欲しい。

1・8 朱莉より

* * * * *

日付けは内戦が始まった2日後だった。朱莉はちゃんと生きている。

「よかった……本当によかったよ」

塔子は涙を流しながら喜んだ。

「塔子と智樹は受験前なんだからきちんと学校に行け。これは朱莉からの直接の手紙だ。俺は安心していいと思う」

「……わかった。私、明日からちゃんと行く」

「智樹は？」

「俺も行くよ」

「よし「よし！……あとこの手紙が届いたことは誰にも言うな。外務省は朱莉の足取りは把握するのに必死だろう。でもこれがバレると朱莉はやりたいことがやれなくなるから」

俺と塔子は静かに頷いた。兄貴は2人の返事に満足そうに笑顔を見せた。

後から考えてみればおかしかったんだ。
朱莉からの手紙の消印が、朱莉の行っていた国じゃないことも、

たった1枚の手紙であんなに落ち着く兄貴も、
状況下で帰国しないで、何かをやらうとする朱莉も。
俺がそんなことに気づくのはまだまだ先のことになる。

プレゼント（前書き）

この章は 塔子 目線です。

プレゼント

3月、私と智樹は無事に同じ大学に合格した。

智樹は空手でインターハイ2位になるほど強くなって、空手に力を入れている大学から推薦の話も来てたけど、私と同じ大学を受けてくれた。智樹の学力じゃ厳しい大学だったけど、空手を続けることを条件に合格した。

卒業した私は18歳の誕生日を迎えたので雅弘が誕生会と2人の卒業祝いをしてくれることになった。今までの誕生会と同じように家でやると思っていたら、雅弘は出掛けよう、と言って私たちを連れ出した。

「何処に行くの？」

「まだ内緒」

行き先を想定出来ず智樹と目を合わせたけど、智樹もわからないみたいで首を横に振った。そんな私たちの様子を楽しみながら雅弘は駅までの道を歩き始めた。乗り込んだ電車は4月から通う大学の方面に向かって走って行った。

大学がある駅から歩くこと数分、3人は1軒のマンションにたどり着いた。雅弘はポケットからカギを取り出し、セキュリティ装置に差し込んだ。オートロックのドアが開くと、雅弘は2人に中に入るように促した。私たちはここに何かあるのか見当も付かず、黙ってエレベーターに乗った。

エレベーターは10階で停まり、雅弘は廊下を歩いて行く。

「兄貴ここって何？」

雅弘は扉のカギを開けながら満面の笑みで答えた。

「塔子開けてみて」

私はゆっくり扉を開いた。

「……………」

そこは何の変哲も無い普通のマンションの一室。智樹と雅弘の顔を見ると上がってと言われ、靴を脱いで廊下を真っ直ぐ進んだ。

正面の扉を開くとそこはリビングで、ピザやポテトのデリバリーが並んでいた。私たちは黙って呆然とそれらを眺めていた。

「……………リアクション無し？」

雅弘の言葉に智樹がため息をついた。

「……………兄貴、先に説明してくれ。ここはナニ？」

「……………まあとりあえず座れ」

おそらく雅弘は2人が、うわー！何これー！！みたいな反応をするのを期待していたみたいで、少しガツカリした表情でテーブルの前に座った。私と智樹が席に座ると、雅弘はバッグから小さな箱を取り出した。

「俺から塔子と智樹にプレゼント」

2人は頭のハテナマークが消えないまま箱を受け取った。
箱を開くと中にはカギが2つ入っていた。カギはピンクのキーリングで束ねてあった。

「兄貴、何のカギ？」

智樹は青いキーリングを回しながら言った。

「1つはこの家のカギ、もう1つは部屋のカギ」

そう言つて雅弘が指す扉には『Tohko』と筆記体で書かれたプレートが下げられていた。隣の扉には『Tomoki』、反対には『Masahiro』、そしてその隣には『Akari』のプレートが下がっていた。

「兄貴、ここつてまさか……」

「俺が借りた。ここならお前らの大学も近いし便利だろ？」

私も智樹も思わず固まった。

「これからはここが俺たちの家だ」

雅弘はニヤリと笑った。

「……え……っ?！」

少し間をおいて意味を理解して私たちは同時に声を上げた。

「こ、ここ4LDKだよ?!最上階だよ?!家賃いくらする?!もつと安いトコにした方がいいって!」

「それに俺と塔子は大学近いけど、兄貴は電車で乗り換えて1時間半だぜ?!」

「まあ落ち着けて。」

雅弘は興奮状態の2人をなだめた。

「家賃は俺が全部払うけど小遣いくらいは自分たちでバイトでもしろよ?あと俺は大学には車で行くから大丈夫」

「免許は取ったけど車持つてねえじゃん!」

「買った」

「はあ?!」

雅弘は自分の黒いキーリングに付けている3コ目の力ギを智樹に見せた。

「兄貴さあ……金どうしたの?」

「そつだよ、雅弘なんでそんなにお金持つてるの?」

マンションは賃貸にしても初期費用はかなりかかるし、車も買ってる。でも雅弘がバイトしてるのなんて見たこともないし……明らかに怪しい。

私たちは真剣な目で雅弘を問い詰めた。

「そんなにコワイ顔すんなって！実は俺な、株をやってるんだ」

「株？」

「そう。さすがに会社作るのはまだ無理だから、とりあえずお前たち食わしてやれるように独学でやってるの。だから生活費の心配はするな」

「雅弘すごい！」

「ってか兄貴はそれを先に言えよな！てっきりヤバイ金かと思ったじゃんか」

雅弘は鼻で笑い自分の頭を指でつつきながら話した。

「俺はお前と違ってココがキレるからな！それに昔からの約束だろう？智樹は強くなる、塔子は料理をがんばる、俺は経済面ってな！」

智樹は笑って頷いた。

「雅弘……それに智樹もありがとう！」

私は改めて自分はみんなに支えられていることを実感した。

翌日、雅弘の車で少ない荷物を運び、私はこれまで過ごしてきた施設を出た。マンションでは先に荷物を運んだ智樹が片付けをしていた。

「雅弘、朱莉の部屋のカギ貸して」

「朱莉の部屋？ベットとテーブルしか無いけど？」

「少し風を通すだけだから」

雅弘は自分の部屋から赤いキーリングを取り出し私に手渡した。

―カチャ

赤いテーブルとグレーのベットだけがある薄暗い部屋の窓を開け、光と風を招いた。私はまだ少し冷たい風を吸い込み、ゆっくり目を閉じ呟いた。

朱莉、帰ってくるのをこの家で待ってるからね。
3人でずっと待ってるからね。

雨（前書き）

この章は 塔子 目線です。

雨

私は智樹と弘樹に支えられて日々の生活を送っていた。そんな二人に心配かけないようにいつも笑っているようにした。実際、本当に辛いことなんてほんの少しだけ。そんなの笑っていられた。

でも朱莉いないのはどうしようもなく、二人がいない日にリビングの壁にかかった赤いキーリングを手にとり、朱莉の部屋で一人泣くこともあった。

内戦直後の手紙以来、朱莉からの連絡は途絶えていた。朱莉は19歳の誕生日も20歳の誕生日にも帰っては来なかった。

私たちは少しずつ朱莉のことを口にしなくなった。口にすると自分も二人も重たい気分になるから……。朱莉がいなくなった生活に慣れてきたのかもしれない。

放課後、買い物でもして帰ろうと思ったのに教室には智樹がいない。

(……何処に行ったのかな?)

私は教室を見回して智樹を探した。

「塔子ちゃん!」

「あつ、平沢くん」

平沢くんは高校からの同級生で智樹の親友。大学でも智樹と同じ学科を取っている。

「平沢くん智樹知らない？」

「あいつなら午前の講義終わって帰ったよ。なんかバイトの人数足りないんだって」

「そうなんだ」

（ひとことメールくれてもいいのに）
私は小さくため息をついた。

「塔子ちゃん今からヒマ?! たまには俺とお茶でもどうよ?」

「平沢くんまた彼女とケンカしたんでしょ」

「……バレた？」

平沢くんは苦笑いをしながら頭をかいた。

「ごめん! 話は聞きたいんだけど今日は帰るね。雨降りそうなのに洗濯物干して来ちゃったから」

顔の前で両手を合わせてから、バッグを肩にかけ平沢くんから離れた。

「あつ! 塔子ちゃん!」

振り返ると平沢くんがキョロキョロしながら近づいて来て、小声で話した。

「あのさ……、高倉朱莉から連絡ってない？」

「……無いよ。なんで？」

「……………」

平沢くんは口に手を当てながら私に背を向けた。

「平沢くん！！」

私は腕を掴んで強引にこっちを向かせた。あまりに大きな声を出してしまって教室に残っていた数人の視線が一気に集中した。私はそんな視線は気にならなかった。

「何かわかったの？」

「……20分でいいからお茶しよう」

平沢くんは私にそう行って教室を出た。
私たちは大学の前の喫茶店に向かった。

コーヒーが運ばれ一息つくと平沢くんが口を開いた。

「俺の親父が警察官なのは知ってる？」

平沢くんのお父さんが警察官で結構偉いってことは知っていたから私は静かに頷いた。

「実は親父は高倉の件の調査してるんだけど……」

平沢くんは私と目を合わせたまま少し言葉を詰まらせた。

「高倉、日本にいるかも知れないって」

「……朱莉が……日本に？」

少し沈黙が続いて、グラスの氷がカランツと音を響かせた。

「数件の目撃情報が警察に入ったらしい。でも国内を転々としてるし、ガセの可能性もある。極秘の情報だけど智樹と塔子ちゃんには知らせてこうと思ってさ」

「そっか、ありがとう」

私はなんて答えればいいのかわからなくて、ほとんど何もしゃべらないまま店を後にした。

家に向かって歩き始めると我慢していた雨雲が一気に雨を降らせた。

「あつ、洗濯物」

今さら走って帰ってももう間に合わない。私は雨にうたれびしょ濡れになって帰った。

でもよかった。おかげで泣いてたのは周りの人にバレてないよね。

家に着いてリビングに入ったけどまだ2人とも戻ってなかった。
私は濡れた服のまま朱莉の部屋のカギを取りに行った。

ない。朱莉の部屋のカギがない。いつもはリビングにかかっているのに。

私の胸は大きく高鳴った。まさか……。自分を落ち着かせながら朱莉の部屋に向かった。

ドアノブに手をかけひねるとやっぱりカギはかかっていなかった。静かにドアを開き、ゆっくりベットに近づいた。待ち望んでいた者は滲んでいく視界に確かに映っていた。

私はベットの横に跪き、震える唇で小さく名前を呼んだ。

「……………かり」

そつと髪に触れる。あんなにキレイだった長い黒髪は肩より短くカットされていた。

「ん……………」

朱莉は一瞬眉間にシワを寄せて、ゆっくり目を開いた。

「……………塔子？」

「朱莉っ！！」

私は朱莉に覆いかぶさり大声で泣いた。もうどこにも行かないようにと精一杯の力で抱きしめた。

「塔子……ごめんね、2年も遅くなっちゃった」

私は声を出せず、必死で首を横に振った。

「塔子とりあえず着替えよう？濡れた風邪ひくよ、ね？」

朱莉に連れられて自分の部屋に戻ったところで私の安堵し意識を失ってしまった。

夢を見た。急いで朱莉の好物をたくさん作って帰ってきた智樹と弘樹と4人でおかえりパーティをしていた。

そういえばまだ朱莉におかえりを言っただけでなかったなあ。目が覚めたら最初におかえりを言わないと……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9570a/>

クォーター

2010年10月10日03時14分発行